

令和5年11月22日（水）
名古屋市東生涯学習センター
18：30～

名古屋民俗研究会11月例会

中根町見当流棒の手について

1 はじめに

2 「棒の手」とは何か？

- 棒や木刀、真剣、薙刀などを採り物にした武芸（棒術）的な民俗芸能
 - 愛知県を中心に分布
 - 東：設楽町貝津田、西：弥富市境、南：南知多町内海、北：江南市安良
 - 岐阜県多治見市小木にも分布
 - 棒が持つ呪術的な要素が発達した神事芸能＝「風流」の芸能として展開
 - 修験者（山伏）の関与が強く指摘されている。
 - 発生譚として、戦国時代の城主や合戦に結びつけられることが多い。
 - 武芸の例にならい、これまで説明されてきた「農民武術」として発展
 - 棒の手は「馬の頭」の警固として伴うことが多い。＝「馬の頭に棒の手はつきもの」

3 主な棒の手の流派

| No. | 名称 | 地域 |
|-----|-------------------|------------------------|
| 1 | 鎌田流 かまたりゅう | 豊田市・西尾市・みよし市 |
| 2 | 見当流 けんとうりゅう | 名古屋市・豊田市・日進市・みよし市・長久手市 |
| 3 | 起倒流 きとうりゅう | 瀬戸市・豊田市・みよし市・長久手市・設楽町 |
| 4 | 検藤流 けんとうりゅう | 名古屋市・春日井市・豊田市・尾張旭市・日進市 |
| 5 | 藤牧検藤流 ふじまきけんとうりゅう | 豊田市・長久手市 |
| 6 | 鷹羽検藤流 たかばけんとうりゅう | 名古屋市・豊田市・長久手市 |
| 7 | 源氏天流 げんじてんりゅう | 名古屋市・春日井市・小牧市 |
| 8 | 神影流 しんかげりゅう | 名古屋市・江南市・小牧市 |
| 9 | 無二流 むにりゅう | 尾張旭市・岐阜県多治見市 |
| 10 | 式部流 しきぶりゅう | 安城市 |

| | | |
|----|--------------------------------|-----------|
| 11 | 夢想流 むそうりゅう | 豊明市 |
| 12 | 真影流 しんかげりゅう | 名古屋市・江南市 |
| 13 | 直心我流 じきしんがりゅう | 尾張旭市 |
| 14 | 東軍流 とうぐんりゅう | 春日井市・尾張旭市 |
| 15 | 直師夢想東軍流 じきしむそうとうぐんりゅう | 尾張旭市 |
| 16 | 見当高羽流 けんとうたかぱりゅう | 東郷町 |
| 17 | 関生高羽検当藤牧流 せきおたかばけんとうふじまきりゅう | 東郷町 |
| 18 | 渚流 なぎさりゅう | 弥富市 |
| 19 | 真陰流 しんかげりゅう | 春日井市 |

※南知多町内海の棒の手は、どの流派にも属していない。

- 棒の手の伝承には免許皆伝の巻物（棒目録・氏名録）が授与
→ 流派発生の要因（巻物については門外不出の権威付けがなされる）

4 中根町見当流棒の手について

■名称

中根町見当流棒の手（名古屋市指定無形民俗文化財／昭和 48 年 10 月 15 日指定）

■伝承地

名古屋市瑞穂区中根町

■組織

中根町東八幡社見当流棒の手保存会

■上演の時期及び場所

東八幡社例祭：10 月 15 日に近い日曜日（令和 5 年は 10 月 8 日）

■由来

天文 23 年（1554）の頃からこの地に始まったという見当流の創始は、加賀の本田遊無公なる人が奥義を究めたことによるといわれている。当時の中根城主織田信秀の子信照（織田信長の弟）がこの棒の手の妙技を以後大いに奨励したといわれている。明治元年の明治天皇御東遠の折熱田の八丁畷で展覧に供したという言い伝えがある。（『第 69 回名古屋まつり郷土芸能祭パンフレット』2023 年）

昭和 40・50 年代は活動が低迷した時期があったが、平成 7 年（1995）頃に東八幡社の呼びかけによりおよそ 20 年ぶりに再興され、現在に至る。

■扮装

黒・濃紺を基調とした絆纏・股引・手甲・脚絆・足袋、白を基調とした襷、帯・腰紐、刺繡を施した胸当、草鞋

■道具（採り物）

ナガカマ（長鎌）、ナギナタ（薙刀）、ヤリ（槍）、ボウ（六尺棒・五尺棒）、カタナ（大・小）、シッペ（竹製の鞭）、テガマ（手鎌）、ジュッテ（十手）、タチ（木刀）

■演目

棒目録には30ほどの演目が記されているが、現在は下記の14の演目を継承している（実際は「四人棒」を除く13演目を披露）。

1. ハンテント、2. 四人棒、3. シンボウ、4. チラシ、5. 水車、6. イナズマ、7. シンケン
8. ナギナタ、9. 腰車、10. シッペ、11. ネジフセ、12. 二本槍、13. モギ、14. カマ

中根町見当流棒の手ではハンテントを基本とし、小学生に3年ほどかけて修得させていく。修得にあたっては口伝による反復練習を是とし、ビデオ等の映像を参考にした練習はおこなわない。

■行事次第

①練習

- 練習会場 東中根公民館
- 土・日・祝日の19:00～21:00（19:00～20:00=子ども、20:00～21:00=大人）
- お盆明けに練習開始 ※令和5年は8月19日（土）
- 練習終了は東八幡社例祭の一週間前 ※令和5年は10月1日（日）
- 子どもは小学3年生から募集・参加
- 開始には「棒開き」、終了には「棒納め」の神事をおこなう。

②宿まわり（例祭前日の土曜日）

- 東八幡社の下記の氏子町11町が設けた宿をまわり、棒の手を披露していく。棒の手の隊列は、各宿への入退場にはラッパを先頭に「ワッセ、ホッセ」という掛け声を出しながら、それぞれの宿をめぐっていく。隊列は宿に到着すると円陣を組み、道具（採り物）を掲げる。披露の際には、法螺貝を吹き、清めの塩を撒く。棒の手への祝儀は氏名・金額を記した祝儀袋で渡し、適宜披露される。祝儀は「東西、東西、ご覧のとおり金は五千両（5,000円の場合）。○○様より頂戴いたしました」という口上で披露される。

1. 東中根、2. 南中根、3. 井ノ元、4. 南白砂、5. 東井ノ元、6. 中白砂、7. 東白砂、
8. 西白砂、9. 北白砂、10. 東中根北、11. 山下

③東八幡社例祭

●午前

11:00頃、棒の手の石碑（先師碑）の前で神事をおこなう。石碑は昭和27年（1952）に建立され、裏面には免許皆伝の巻物（棒目録・氏名録、マキ〔巻〕という）を伝授された歴代の氏名が記載されている。巻物が伝授された人はマキモト（巻元）と

いう。マキモトは存命中にマキを次のしかるべき人に渡すものとされ、渡せなかつたマキはシニマキ（死に巻）といい、二度と使用することはできないという。

●午後

東中根公民館前での昼食後、12:00頃に棒の手の隊列は東八幡社に向かって出発する。ラッパを先頭に南側の鳥居から境内へ入場し、社殿を一周する。先師碑の前で棒の手を奉納し、次に社殿前でも奉納する。その後は、隊列を組み、東八幡社西方にある北條八幡社（中根南古城址）と観音寺（浄土宗）、西中根の宿をまわり、棒の手を披露する。13:00頃に東八幡社に戻り、棒の手の奉納・披露をおこなう。その後、境内では餅投げがおこなわれる（令和5年は雨のために餅投げはおこなわれず、氏子に餅が配られた）。

④西八幡社例祭（東八幡社例祭の次の日曜日）においても棒の手を奉納

■馬の頭との関わり

●昭和19年生まれの話者によれば、小学校5、6年生の頃（昭和30年頃）まで馬道具を受けた馬の奉納（馬の頭）があり、飾り馬は神社東側の道を駆けていた。5、6年上の先輩は熱田神宮へ馬を奉納していたという。

→ 例祭にあたり、拝殿に2頭分の馬道具が並べられる。西八幡社にも1頭分の馬道具が残されている。

→ 热田神宮への献馬は「热田合宿」の名残りかもしれない。合宿とは「合属（がっしょく）」ともいい、江戸時代から大正時代にかけて近隣の村々が集まって寺社に飾り馬を奉納していた。热田神宮の他に、龍泉寺（守山区）や猿投神社（豊田市）にも合宿が形成されていた。

→ 棒の手の隊列は「ワッセ、ホッセ」という掛け声を出すが、馬の頭の警固の名残りを示すものかもしれない。

5 おわりに

【参考文献】

名古屋市博物館部門展図録『馬の塔と棒の手—祭りに生きる伝統—』、1981年

三好町立歴史民俗資料館『「三好の棒の手」調査報告書』、1990年

長久手町史編さん委員会『長久手町史 資料編4 民俗・言語』、1990年

新修名古屋市史編集員会『新修名古屋市史 第9巻 民俗』、2001年

愛知県教育委員会『愛知県民俗芸能緊急調査報告書 愛知県の民俗芸能』、2014年

新修豊田市史編さん専門委員会『新修豊田市史17 別編 民俗 民俗の諸相』、2017年